

展覧会のお知らせ

■常設展示

小川原脩展 「小川原脩 遙かなるイマージュⅡ」

会 期：開催中～平成 31 年 1 月 20 日(日) 会 場：第 2 展示室

小川原脩展 「小川原脩 遙かなるイマージュⅢ」

画家・小川原脩が一生をかけて追い求めた「遙かなるイマージュ」の世界。アジアの清澄な空間を描き出す、小川原脩晩年の代表的作品を中心にをご紹介します。

会 期：開催中～平成 31 年 4 月 14 日(日)

会 場：第 1 展示室

■企画展示

くっちゃん ART 2019

今年で 11 回目を迎える「くっちゃん ART」は、倶知安町はもとよりニセコ・羊蹄山麓周辺で芸術活動に身を置く作家、さらにはそれらの作家と交流のある海外在住の作家が多様な表現による多彩な作品を持ち寄り、さらなる交流を深める、この地域ならではの国際性を反映したユニークな展覧会です。小さな美術館で、多くの作家が集う、賑やかな展覧会を開催いたします。

会 期：2 月 2 日(土)～4 月 14 日(日) ※初日観覧無料

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

アート探訪〈みて・きいて〉24「ウフィツィ美術館～フィレンツェ・メディチ家の至宝」

世界遺産の町フィレンツェ。そして、メディチ家歴代の美術コレクションを収蔵するイタリア・ルネサンス絵画の宝庫「ウフィツィ美術館」を、世界最高の映像テクノロジー技術で旅しましょう。

日 時：1 月 12 日(土) 14 時～15 時 40 分

お話し：柴 勤（当館館長） 会 場：当館映像ルーム（無料）

アート探訪〈みて・きいて〉25「ラファエロ～聖母子の画家とその恋人」

ルネサンス期を代表する天才ラファエロの作品「ラ・フォルリーナ」には、彼と下町の娘との恋の物語が秘められています。彼女の足跡を追いながら、ラファエロの人間像を明らかにします。

日 時：1 月 19 日(土) 14 時～15 時

お話し：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム（無料）



11 月 17 日 ワークショップ
「木版リトグラフ体験」を
開催しました

ミュージアム 通信

小川原脩記念美術館 ☎ 21-4141

観 覧 料：一 般 500 円 (400 円)

高 校 生 300 円 (200 円)

小中学生 100 円 (50 円)

倶知安風土館 ☎ 22-6631

観 覧 料：一 般 200 円 (100 円)

高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は 9 時～17 時

入館は 16 時 30 分まで

※（ ）内は 10 名以上の団体料金

1 月の休館日 毎週火曜日

1～5 日 年始休館

21～25 日 展示替え休館

26～31 日 美術館のみ休館

パリの仲間たち

パリに着いてひと月になろうかという 11 月の終わり頃、函館出身の知人が、自宅で倒れ入院しました。それから帰国するまでの 2 カ月間は、仕事が終わると病院へ駆けつける日々。はじめの頃は、何を話しかけても無表情、無反応。笑顔が出るまでには、しばらくかかったような気がします。

パリには「ポプラ会」という北海道人会があります。その仲間たちが交代で姿を現すようになり、病室は病人を囲んで一種のサークル状態に。メールでのネットワークもできました。ベッドの上のご本人もご満悦の様子、次第に言葉を発するようになりましたが、それは何とフランス語ばかり。中原中也の詩を口ずさむような人だったのですが、不思議なものでね。

館 長 柴 勤

冬休みは

小中高生の美術館観覧が無料！

1 月 20 日まで、小中高生は無料で観覧できます。冬休みはぜひ美術館へ！
※風土館はいつでも小中高生無料

感動一点 の場

『ニセコアンヌプリ』 1980 年頃 小川原 脩 画



冬、ニセコアンヌプリの山頂から麓まで、深い雪で覆われている姿を描いた一枚である。

尾根や谷筋、そして中景の丘陵は柔らかな輪郭線で描かれているのが印象的だ。淡く膨らみのある線は水墨画を思わせる。

小川原脩は、1979 年、80 年と続けざまに中国桂林を訪れ、その水墨画の世界に身を置いた。東洋の空気感を油彩で表現することに苦心し、絵の具を薄く塗り重ねる方法にたどり着いた。画家が暮らした倶知安からの風景であるこの作品にも、空、山、そして線に、さまざまな色彩が淡く織り込まれている。

ふるさとの山として、イワオヌプリと並んで多く作品に登場するニセコアンヌプリは、小川原にとって常に心にある造形（かたち）でもあった。天空へ鋭角にそびえる山頂の表現は、この後の代表作「^{てん}巔」へと展開していく。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

— 炬燵（こたつ） —

ふる探訪 さと

429 回

日本で最初の炬燵（こたつ）は、室町時代に禅宗寺院で使われていたといわれています。その当時の炬燵は、いわゆる掘り炬燵で、部屋の中央にある炉の上に、組み格子にした木の檯（やぐら）を置き、その上から小袖などの着物を覆ったものでした。

「待つ身につらき夜半（よわ）の置炬燵（おきごたつ）、それは恋ぞかし、」

これは、明治 28 年から 29 年に書かれた樋口一葉の「たけくらべ」からの一節です。

置炬燵とは、持ち運びができるもので、木の檯の中に行火（あんか）や土火鉢の火入れを入れ、炬燵布団を掛けたものです。一般に普及していたものは、四十センチ角ほどの大きさで、大正から昭和初期にストーブが普及するまでは、囲炉裏、火鉢と同様に重要な暖房器具の一つでした。昭和 25 年 12 月発行の主婦向け雑誌に「奥様家事教室・暖房のいろいろと有効な使い方」とあり、そこには置炬燵の使い方、燃料の節約法、炭火の取り扱いの注意が書かれていて、普通に置炬燵が使われていた様子がうかがえます。昭和 30 年代には、炭火に代わって電気炬燵が普及しはじめ、

現在でも冬の暖房器具として一般的に使われています。家族で温かい炬燵に入ってみかんを食べる。そんな幸せな一時がこれからもなくなることがないようにと願っています。



▲置炬燵（倶知安風土館収蔵品）

（左）縦横 40 ㌢・高さ 32 ㌢、（右）縦横 32 ㌢・高さ 27 ㌢

文：森脇 友行（倶知安風土館 生涯学習専門員）